

私の

苦労話・失敗談

ソフトの自社開発に苦労

日本ルツボ(株) 社長 大久保正志

私は当社入社以来ずっと管理畑を歩んで参りました。その中のエピソードをお話したいと思います。

1975年に地方勤務から、東京・恵比寿本社 of 経理部に転勤になった際、当時の上司に今後のコンピューターの重要性を説明し、導入を進言したところ、導入責任者に任命されました。当時の給料が8万円で、ソニーの12桁の計算機が給料の4-5倍と非常に高価であった事を記憶しています。勿論日常業務は皆さん算盤が主体でした。

当社導入の一世代目の機器は、M社製のオフィスコンピューターで、支店、工場、本社へ導入致しました。支店用は本体に8インチのフロッピーディスクのロットが2個あり、1個がデータ用、1個がプログラム用で、画面の指示に従ってデータ用のフロッピーを抜き差しして使用するような代物でした。本社用の機器は少し大きく、レーザーディスク状の盤が5枚連なったディスクパックを記憶媒体として、本体にセットする仕様でした。フロッピーの記憶容量は128Kバイト、パックでも5Mバイトでした。今ならデジカメの写真1-2枚で一杯になる程の極めて小さな記憶容量でした。しかし計算結果が「ゴーツ！」とカタカナと数字で小型輪転機のようなラインプリンターで出力されるのを、ワクワクして見ていた記憶があります。

その後電子機器の開発が進み、ハードウェアが安価になって来ると、相対的にソフトウェアの開発費が高額になりました。当社では開発費低減のため、全てをメーカーに任せず、社員にCOBOL言語を教育し、数百本のプログラムを作成致しました。しかし、コンピューターの処理能力が遅く、コンパイルに非常に多くの時間を要し、とても苦労を致しまし



写真 ニュージーランドのテカポ湖にて妻と

た。しばらく後の西暦2000年問題でも、プログラム対応で苦労したことが思い出されます。

それから十数年、記憶装置の容量はギガになりテラバイトが主流になりました。ソフトウェアを作る時代から、良質のパッケージソフトを選択して使う時代になり、出力指示をすると数十万件のデータ処理が数秒で出来るようになりました。

私が入社した43年前の恵比寿は山手線の中でも、町工場が多く残るローカルな地域でした。現在は東京で最も住みたい街No1になり、おしゃれな店や素敵なオフィスが建ち並ぶ魅力的な街並みになりました。窓の外を眺めながら昔の苦労を懐かしく思い、時代の変化を感じています。

JFS inc



写真 ニュージーランドのマウントクックにて